

平成30年～令和元年新品種・新技術の確立支援事業  
空きハウスを活用した種子イチゴ「よつぼし」栽培の手引書

中央農業改良普及センター

1. 種子イチゴ「よつぼし」の品種特性

三重県農業研究所、香川県農業試験場、千葉県農林総合研究センターと国立研究開発法人農業・食品産業総合研究機構九州沖縄農業研究センターの4機関が共同育種に取り組み、「よつぼし」が育成された。

「よつぼし」は、三重県育成の「三重母本1号」を母親品種、香川県育成の「A8S4-147」を父親品種とするF1品種である。早生性、四季成り性（長日性）、連続出蕾性などの形質が「よつぼし」に受け継がれている。

果実特性は、円錐形、鮮紅色でツヤがある果皮色、果肉にも赤身が入る。果実の大きさは、かおり野、紅ほっぺ、章姫よりやや小さい。硬さは章姫より硬く、さちのかより軟らかい。糖度と酸度はともに高く、濃厚な味わいである。

2. 活用する空きハウスの想定

3月から6月頃以外の水稲育苗ハウスの空き期間や、イチゴ苗の採苗ハウス利用後の空き期間などを利用して栽培する。

3. 種子イチゴ「よつぼし」の直接定植栽培

(1) 種子イチゴ「よつぼし」の苗

苗は、購入苗（406穴セル苗）を活用する。定植する3か月以上前には種苗会社へ注文する。

(2) 本圃準備

水稲育苗ハウスの空き期間を利用する場合は、水稲育苗苗箱（30cm×60cm）を重ねた土台を作成し高設栽培となるよう工夫する。

栽培するプランターは発泡の独立プランター（S工業製品）を用いるとよい。

培土は、肥料成分が入っていないものを選ぶ。排水性と保水性に富んだものが良い。

(3) 直接定植の場合

406穴セル苗は、7月下旬までに購入し、苗到着後すぐに定植する。ただし、ランナーを利用する場合は、6月下旬から7月上旬までに定植する。

(4) 定植した元株と発生ランナーの利用

・ランナーの固定

7月初旬に定植した場合、8月初旬からランナー固定を行う。

・ランナー切り離し

ランナーを固定し十分な活着が確認できたら、切り離しを行う。

・花芽分化の促進処理

花芽分化は、窒素中断による促進処理を行う場合、8月20日頃を目途として、窒素中断を開始する。窒素中断開始後は、葉柄中の硝酸態窒素濃度の測定や、栽培ベッドの排液ECを定期的に測定する。

(5) 定植後の葉かき、芽かきの栽培管理

直接定植後、約1か月位経ってから葉かきを行う。目標葉数は2.5枚から、3枚。この時に、芽かきの整理とともに、ランナー固定を合わせて行ってもよい。

(6) 施肥と窒素中断

施肥管理は、定植株の生育状況に合わせ、EC濃度0.4~0.5 ms/cmの液肥管理で行う。

(7) 花芽分化

8月20日頃から、窒素中断による促進処理を行う。9月20日過ぎを目途に、花芽検鏡を行って花芽分化を確認する。

(8) 花芽分化後の葉かき、芽かきなど栽培管理

花芽分化確認後、液肥管理を行うが、花芽分化状況によっては、果形の乱れなどに影響するので、注意が必要である。

(9) 訪花昆虫の利用

空きハウス利用で、水稻育苗ハウスを有効活用する場合、ビニール被覆資材によっては、訪花昆虫のミツバチが飛来しないおそれがある。その場合、ヒロズキンバエ(ビーフライ)の利用により受粉効果が期待できる。

(10) 植物LED照明

冬季の光線量が制限される地域(中山間など)では、植物LED照明により光合成促進を高めることが有効である。

(11) 冬季の保温対策

冬季は、暖房機利用が望ましいが、無加温で行う場合は、内張被覆を行い保温確保に

努める。

(12) 病害抵抗性

炭疽病には罹病性があるので、注意する。萎黄病は強い。うどんこ病は明らかに弱いという品種でない。